ゆずりは通信

第３２号　平成 29 年 12 月 20 日
（年２回発行）
発行：ゆずりはの会事務局
電話：0565-35-7182
Ｅ－ﾒｰﾙ：takekaki@hm8.aitai.ne.jp
ホームページ；
http://www.hm9.aitai.ne.jp/~warabino/

ゆずりはの会平成 29 年 5 月定例会

ゆずりはの会 5 月定例会

5 月 9 日（火）午後 7 時～　福祉センター　34 会議室　11 人が出席

内容

1．　愛知ホスピス研究会　第2回講演会　ウイル愛知　2017/04/09

「不安に寄り添う～介護と病の経験から～」岸本葉子氏　：　淑徳大学客員教授

河野さんがまとめて下さいました。

認知症の症状がみられるようになった父親を5年間在宅で介護した。 自らは　虫垂がんをわずらっていた。その二重苦の経験から知りえたことを講演された。認知症患者を介護する戸惑いと受け入れの過程で学んだこと、認知症患者とがん患者は、未来へ続く時間軸が立てにくいなどの共通点を感じたなど。

2. 豊田市高齢者等実態調査結果報告書の概要

平成 29 年度に策定する第 7 期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画に、市民の意見を反映させるために行われた調査の概要をコピーして配布し、簡単に説明があった。

一通りの調査が行われており、集団として意識はつかまれていると思うが、困っている一人一人の事情に、深く分け入って、解決策を考えようと言う姿勢は少ないように思われる。

3. 希望の証

株式会社：くまひらが発行している小冊子：抜粋のつづりの中の一文である。
心臓に疾患があって、誕生後にすぐに死んでしまうだろう子を身ごもった母親の苦悩をつづった文章。中絶するか、産むかの判断に、命とは何かの価値観が反映する。その意味で最期の時の判断に共通するところがあるように思う。

この手に抱き、おっぱいを飲ませることもできなかったが、それでも、母親は、産んだ。
命の灯をともさないで、処置してしまう事では、とても納得できなかったのではないか。

4.「ささえあい、たすけあい、地域だんらん、まちづくり」

～おたがいさま運動広げて～　　南生協医療病院　松下、大野

あいちホスピス研究会第3回公開講座　4 月 23 日

名古屋市に、伊勢湾台風の経験から、住民が作った病院がある。現在 8 万人の会員が、この病院を核として、地域活動を盛り上げ、住みよいまちづくりを行っている。その活動事例のいくつかが紹介された。

5. 学び舎ふむふむ

新しい人が入会しました。曾我部智子さんです。

表題の新しい活動は、会員の釘宮さんと曽我部さんが、案内役となって、身近なものを題材に何かを発見し、考え、伝え合うことを学び合う教室であり、フリースペース K で開かれる。昔は、日々の暮らしの中で、お付き合いがあり、考え、発見し、工夫する機会があったが、今は少ないので、意識的にこうした場を作る。

6. 事務的なことなど

＊新しい会員です。曽我部智子さん、先回自己紹介されました。助産師さんです。

ゆずりはの会 6 月定例会

6 月 13 日（火）午後 7 時～　福祉センター　34 会議室

7 人が出席

内容

＊愛知ホスピス研究会　公開講座　の報告

第 4 回　ホスピス緩和ケア　これまでとこれから　柏木哲夫氏講演

第 5 回　映画上映 「いのちのかたち一画家・絵本作家　いせひでこ」

伊瀬監督のトーク

第 4 回　ホスピス緩和ケア　これまでとこれから　　松田さんが報告

柏木哲夫氏

＊1939 年生まれ、78 歳。 大阪大学、金城学院大学にもお務めされた。

＊1984 年、45 歳の時に、淀川キリスト教病院に、日本で初めてのホスピスを開設した。そうした自分の人生を振り返り、思うところを話された。

＊ホスピスケアは、「その人がその人らしい人生を全うするのに寄り添う」ことである。

＊「人は死を背負って生きている」。つまり生と死の関係というのは、ちょうど一枚の紙の表に生があり裏側に死が裏打ちされているようなものである。
しばしば　人は生の延長上に死があるというように、生と死を別々に考えがちだが、本当は常にひとつで、ちょっと風が吹けば紙は裏返り、死がある　ような関係である。

＊死に直面してから突然あわてて死について考えるのではなく、普段から自分の死についてよく考えておくとよい。せめて最低限、一年に一度、自分の誕生日には、自分の死についてよく考え、心の準備をしておくことを勧める。

第 5 回　映画上映「いのちのかたち一画家・絵本作家　いせひでこ」　:82 分　竹内さんが報告

伊勢監督のトーク　:40 分

＊映画:「いのちのかたち」
絵本作家・画家:いせひでこ　の 4 年間の活動を追ったドキュメンタリー映画
2016 年製作。 興行ではなく自主上映されている。

＊ストーリーの舞台は、東日本大震災の津波によって集落が流され、壊滅状態になった宮城県亘理町の吉田浜。荒れ地に根をむき出しにしてひっそりと「クロマツ」が横たわっていた。取り除かれるまでの4年間、いせひでこは、そのクロマツの絵を描き続ける。クロマツに「いのち」を感じ、是非描かなくてはいけないとの衝動にかられた。このことを知った伊勢監督が映像に残そうと、彼女の創作の様子を撮り続けた。

＊伊瀬監督のトーク
映画は少しわかりにくい　くらいが良い。映画は見終わった時から始まるものだ。鑑賞者に、何かが残ったはずだ。それは、受け取る人によってさまざまな形に違いない、などなど、彼が信念をもって映画を作っていることは、理解できたが、見る方にとってはやや難しい、と言う印象だった。

＊この映画 「いのちのかたち」と、高蔵寺ニュータウンの設計者を描いた「人生フルーツ」の予告編を、プロジェクターを使って上映し　観てもらいました。両方とも2分間くらいの短いものだけど、雰囲気は分かったと思います。

3. ゆずりはの会　の開催日時　の変更
今までは、毎月第2火曜日に開催してきましたが、皆さんの都合を考え、第2水曜日に変更します。 したがって次回は、7月12日（水） 午後7時～　福祉センターです。

ゆずりはの会 7 月定例会

7 月 12 日（火）午後 7 時～　　福祉センター　　35 会議室　　8 人が出席

内容

1. 豊田市成年後見支援センター開設記念講演　・・竹内
平成 29 年 6 月 24 日（土） 福祉センター
成年後見制度の PR のための落語公演、そしてシンポジウムがあった。
成年後見制度について、その大切さが、多く語られるが、後見人が対象者のお金を使いこんでしまったなどの、不幸な事例がテレビや新聞などで、報道される。また費用もはっきりしていなくて、普及しているとは言い難い。
この 7 月から支援センターが開設するので、周知が進み、利用が進んでゆくことが期待される。

2. 柏木哲夫先生の選による川柳の紹介　・・　竹内
淀川キリスト病院に初めてホスピスを開院した柏木先生は、笑いとかユーモアを大切にされた。 先生が選んだ川柳　　100 首余りが紹介された。

3. 人間学を学ぶ月刊誌 「致知」の紹介 ・・ 竹山

身体が少し不自由になって、家に閉じこもりがちになった自分に、様々な知恵を与えてくれるこの雑誌を愛読している。

今回は、唾液の大切さについての記事を紹介する。

4. 元気に動き回っている毎日 ・・大間知

現在 73 歳。ある一日。朝、枝豆の種を畑にまいた。

「あすて」に行き、木工で作品を作っている人の、難しい工程を手助けした。

トヨタ会館の下にある「だんらん（トヨタ自動車の社員クラブ）」に行った。7m/秒で動くベルトの上を歩いて、サウナに入った。

じっとしていることが嫌いなので、しょっちゅう動いている。

5. 色々な活動の紹介 ・・ 釘宮

市民活動センター、福祉センター、フリースペース K などで、色々な活動が行われている。

「ボラ連：講演とフリートーク交流会」「共感的コミュニケーションを体験しよう」など。関心のあることには参加しましょう。

ゆずりはの会 9 月定例会

9 月 13 日（水）午後 7 時～ 福祉センター 34 会議室 11 人が参加

内容

＊久米賢一氏（まほろばの郷に勤務、以前は社協）のお話

1. 介護保険法の一部改正の説明

介護予防・日常生活支援総合事業（以下「総合事業」）が開始された。

今まで要支援1、2に適用されていたサービスが、条件が緩くなった。 適用される対象者が広がるし、多くの人が支援をする側に参加できる。例えば、掃除・洗濯などの日常生活支援も行えるようになった。自宅を開放してお年寄りを招くとか、対象者宅を訪れて話し相手をするとか、買い物を手伝うとかも総合事業の一つである。

NPO ボランティア団体、民間企業、協同組合、地域住民など、色々な人が担い手となり得る。

2、久米さんの仕事の一つ

総合事業は、全国一律ではなく、地方自治体がそのサービス内容を決める。法律的に広がったことと、実際にやられることには乖離が生まれる、市町村で差が出る。残念ながら、豊田市の行政側はあまり積極的ではない。「まほろばの郷」のような民間企業ならば、積極的に動ける部分があるので、力を入れたい。

3、久米さんの仕事 その2

障がい者に対するケアマネジャーのような役割を果たしている。現在高校生以下で80人、一般で80人を担当している。本人・家族と会い、問題点を聞き取り、しかるべき施設との橋渡

しをする。以前から障がい者のために働きたいと思っていたことも転職の理由である。

4. 久米さんの仕事　その3

障がい者が働ける場所の提供。障がい者が働いている施設はいくつかあるが、例えば、月に1万円払われているとかで、それで生計をたてるような金額ではない。

付加価値のある仕事をして、もっと多くの賃金が払えるような施設を作りたい、と思っている。

5、質問　サ高住の話が出なかったが？

高齢者の住む場所の問題だが、サ高住で言えば、豊田市は数がそろっている。但し年金が少ない人は入れない。最近は生活保護を受けている人でも、市が差額を補填する形で入れる住宅がある。高齢者の住宅の問題は私も考えてはいる。